

少年少女
日本文学館

8

大岡信

おおおか
まこと

編



明治・大正・昭和詩歌選

meiji taisho showa shiikasen

少年少女
日本文学館 8

明治・大正・昭和詩歌選

大岡信
編

講談社

913

大岡 信・編

少年少女日本文学館 8

明治・大正・昭和詩歌選

講談社 1987

362p 23cm

おおおかまことへん

少年少女日本文学館

第八卷

明治・大正・昭和詩歌選

定価 一四四〇円

(本体 一三九八円)

一九八七年 九月二十一日 第一刷発行

一九八九年 四月 四日 第四刷発行

編者……………大岡 信

発行者……………加藤勝久

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五一一一(大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

製本所……………黒柳製本株式会社

©明治・大正・昭和詩歌選 一九八七年

落字本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。なお、この本についてのお問い合わせは、児童局児童企画あてにお願いいたします。

Printed in Japan

ISBN4-06-188258-9

(児企)

さ
く
じ



詩^し

自然^{しぜん}

地理^{ちり}

動物^{どうぶつ}

植物^{しょくぶつ}

社会^{しゃかい}

生活^{せいかつ}

愛^{あい}

人間^{にんげん}

短歌^{たんか}

自然^{しぜん}

地理^{ちり}

動物^{どうぶつ}

植物^{しょくぶつ}

8

50

66

93

104

125

143

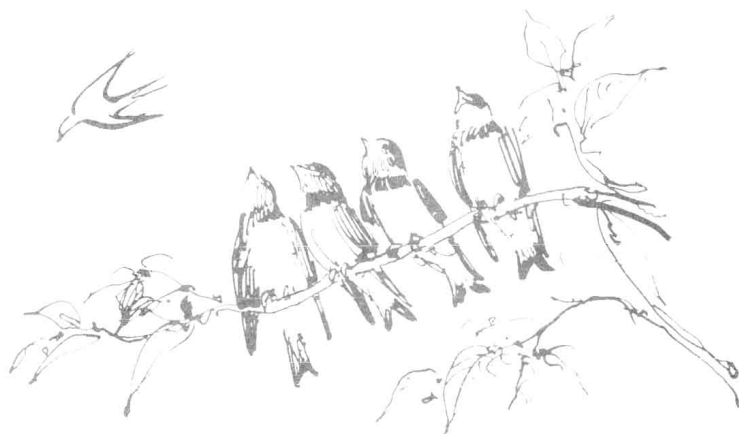
159

228

237

240

245



● 収録作品索引	● 収録作家略歴	● 随筆	● 解説	生活	社会	植物	動物	自然	俳句	人間	生活	社会
.....
351	326	320	312	303	300	294	286	276		259	253	249



凡例

一、この明治・大正・昭和詩歌選は、明治から現代に至る詩・短歌・俳句の中から、少年少女たちが愛誦するに足る珠玉を選んだ。

二、本書は収録作品を、自然・地理・動物・植物・社会・生活・愛・人間の八部門に類別した。

一、詩は、各部門中の項目を左のとおりとした。

自然——季節・天象・氣象・海山・自然

地理——郷土・田園と都会

動物——けもの・鳥・魚介・昆虫・その他

植物——花・果実・草木

社会——政治・経済・戦争・労働・風俗

生活——衣裳・住居・遊び・スポーツ・音楽・宗教

人間——人世・心理・からだ

同一項目の作品は、季節順および作者の生年順に配列した。

二、短歌・俳句については、各部門に類別した作品を作者の生年順に配列した。

三、詩のかなづかいは、読みやすく、鑑賞の手だすけとなるようにとの方針から、現代かなづかいとされた。

一、短歌・俳句のかなづかいは、教科書での文字づかいに準じて原文のままとし、現代かなづかいは原文のままとした。

二、送りがない原句は、漢字のルビは現代かなづかいとされた。

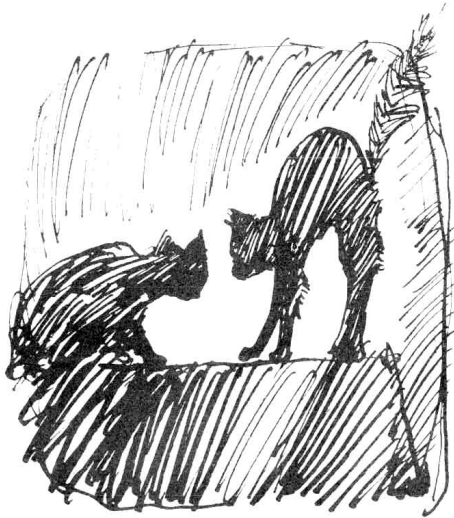
三、本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注を加えた。

加えた。

明治^{めいじ}
・
大正^{たいしょう}
・
昭和^{しやうわ}
詩歌^{しいか}
選^{せん}



詩^し



自^し
然^{ぜん}

〔季節〕

春^{はる}

*
す^すぺいんささげの鉢^{はち}を
外^{そと}へだしてねてもよい頃^{ころ}となりました

こんや
今夜^{こんや}から明日^{あす}の朝^{あさ}へかけて

たいへいよう
太平洋^{たいへいよう}の沿岸^{えんがん}は

あたたか
暖^{あたたか}い雨^{あめ}になるだろうと

田^た
中^{なか}
冬^{ふゆ}
二^じ

す^すぺいんささげ
実^み在^{ざい}しない、作^{さく}者^{しや}により創^{そう}作^{さく}
された植^{しょく}物^{ぶつ}。ささげはまめ科^か
の草^{くさ}。



ささげ

ちようちよう

原文^{げんぶん}は旧^{きゅう}かなづかいで、てふ
てふ。この表^{ひょう}記^きがこの一^{いっ}行^{ぎやう}詩^し
のきわだつた特^{とく}徴^{てい}でもあるが、
こゝでは本^{ほん}書^{しよ}の原^{げん}則^{そく}にした
が、つて、新^{しん}かなづかいに改^かめ
てある。

海洋測候所は報じています

春

ちようちようが一匹韃鞢海峡を渡って行った。

相聞三

また立ちかえる水無月の
歎きを誰にかたるべき。
沙羅のみず枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

安西冬衛

芥川龍之介

韃鞢海峡

タタール海峡。シベリア東岸と樺太との間の海峡で、日本では間宮海峡と呼ぶ。韃鞢(タタール)は蒙古系部族の一つ。

水無月

陰曆八月のこと。

沙羅

娑羅樹。インド原産の高木。花は小形の淡黄色で香りがいい。

みず枝

みづみずしく若い枝。

かなしき人
愛する人。

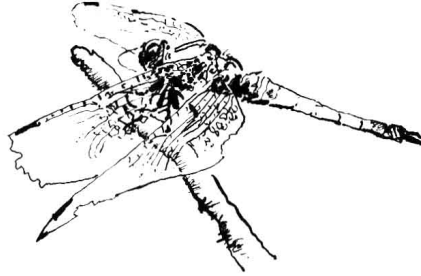
晩夏

停車場のプラットホームに
南瓜の蔓が匍いのぼる

閉された花の扉のすきまから
てんとう虫が外を見ている

軽便車が来た
誰も乗らない
誰も下りない

柵のそばの黍の葉っぱに
若い切符きりがちよつと鋏を入れる



木下夕爾

軽便車
幅の狭いレールの上を走る小型の鉄道車両

黍
いね科の一年草。高さは約一メートル。淡黄色の果実は食用となる。



あき
秋の祈いのり

あき せりよりよう そら
秋は唳 唳と空に鳴り

そら みずいろ とり
空は水色、鳥が飛び

たましい
魂 いななき

せいじよう みず
清浄の水こころに流れ

め
こころ眼をあけ

*どうじ
童子となる

*たかみんさんざつ
多端紛雑の過去は眼の前に横わり

*けつみやく
血脈をわれに送る

あき ひ あ
秋の日を浴びてわれは静かにありとある此を見る

ちちゆう
地中の営みをみずから祝福し

たかむらこうた
高村光太郎

りよりよう
唳 唳
音がほがらかに奏でられるよ
うす。

どうじ
童子
子ども。

たかみんさんざつ
多端紛雑
いそがしく雑事がこみいつて
いること。

けつみやく
血脈
祖先から伝えられる脈々と
した流れ。血統。

わが一生の道程を胸せまって思いながめ
奮然としていのる

いのる言葉を知らず

涙いでて

光にうたれ

木の葉の散りしくを見

獣の嘻嘻として奔るを見

飛ぶ雲と風に吹かれる庭前の草とを見

かくの如き因果歴歴の律を見て

こころは強い恩愛を感じ

又止みがたい責を思い

堪えがたく

よろこびとさびしきとおそろしさとに跪く

いのる言葉を知らず

ただわれは空を仰いでいのる

道程

みちのり。

嘻嘻として

喜んで。

因果歴歴の律

過去の原因によつて現在の状態・結果がひきおこされること
があまりからであること。律は法則の意。

空は水色そら みずいろ

秋は唳唳あき りようりようと空に鳴るそら な

秋の夜の会話あき よ かいわ

さむいね

ああ さむいね

虫むしがないてるね

ああ 虫むしがないてるね

もうすぐ土つちの中なかだね

土つちの中なかはいやだね

痩やせたね

君きみもずいぶんや痩やせたね

どこがこんなに切せつないんだろうね

草くさ野の心こゝろ平へい

腹はらだろうかね

腹はらとつたら死しぬだろうね

死しにたくはないね

さむいね

ああ 虫むしがないてるね

十月がっしの詩

井いの上うえ靖やすし

はるか南みなみの珊瑚礁さんごしょうの中なかで、今年ことし二十何番目なんばんめかの颱風たいふうの子供こどもたちが孵化ふか化かしています。

孵化ふかして
卵たまごからかえつて。

やがて彼等かれらは、石灰質せっかいしつの砲身ほうしんから北きたに向むかって発射はつしやされるでしょう。

そのころ、日本列島にっぽんれつとうはおおむね月明げつめいです。刻一刻こくいつこくあき秋あきは深まりふか、どこか